

平成29年度 京都府小学校教育研究会
道徳教育研究大会
研究紀要

「自己を見つめ、よりよく生きようとする児童の育成」
～仲間とともに考え、深め合う道徳授業を通して～



平成29年12月1日
木津川市立棚倉小学校

はじめに

「特別の教科 道徳」の完全実施を平成 30 年度に控えた平成 27 年度、京都府小学校教育研究会からの委嘱を受け、道徳教育研究協力校としてのスタートを切りました。

道徳の教科化という歴史の大きな転換点のまっただ中に研究を進めていくということで、傍観者としてではなく、当事者として、パイオニアとしてその責任を果たしていきたいと教職員一同熱い思いで歩んできた 3 年間でした。

研究初年度の私たちは、まだまだ未熟で確かな指導観を持っていない教師集団でした。

「考え、議論する道徳」の授業の在り方を模索しながら、考え、議論してきた私たちでした。

「どんな子どもたちを育てたいのか。どんな授業実践をしたいのか。どんな教師でありたいのか。」といった自問自答の日々でした。

四天王寺大学 准教授 杉中康平先生を共同研究者としてお迎えし、「心を揺さぶる道徳授業の実現」を目指して、教材分析や発問について等、授業作りについてご指導をいただきながら、棚倉小学校としての授業のアウトラインが作り上げられてきました。その際『道徳的諸価値についての理解を基に自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。』という道徳科の目標を常に意識してきました。また「どの子ども心の中によりよく生きようとする種を宿している。」という杉中先生の教えがいつも傍らにありました。

日々の道徳教育を、子どもの実態からスタートし、子どもの姿を通して振り返り、課題を明らかにし、全教職員で確認し合い、より実効性のある計画への改善につなげていくように努めました。まさに道徳教育は道徳の授業を要とするカリキュラムマネジメントが重要であることを認識した 3 年間でした。

本校の研究は、「我、必ずしも聖に非ず、彼、必ずしも愚に非ず。ともに是れ凡夫ならくのみ。」という聖徳太子の言葉のように、子どもたちと、教師が向き合い、自らのよりよい生き方、他者と共によりよく生きるための価値を語り合い、共有し合おうとする教職としての根源的な営みと一致するものであったと思います。その中で、子どもたちの姿が少しずつ変わりはじめ、その成長を見つめる教師がその力をたくましく太らせてきました。

この度、私たちのささやかな研究実践を発表し、皆様のご指導、ご助言を賜る機会をいただきました。本日の研究会を糧として、今後ともさらに研究実践を積み重ねていきたいと思えます。

後になりましたが、本校の研究推進にあたり、ご指導・ご支援をいただきました京都府教育委員会、京都府山城教育局、京都府総合教育センター並びに木津川市教育委員会をはじめ関係各位に対しまして、厚く感謝申し上げますとともに、今後におきましても一層のご指導、ご支援をお願い申し上げます。

平成 29 年 12 月 1 日

木津川市立棚倉小学校
校長 河野 收

第1部 研究の概要

1 研究主題

自己を見つめ、よりよく生きようとする児童の育成
～仲間とともに考え、深め合う道徳授業を通して～

2 主題設定の理由

子ども達は社会情勢の変化の中で、主体的に判断し、行動できる力を身に付けていかなければならない。そのためには、一人一人が自分に自信を持ち、自己の生き方についての考えを深め、自己をしっかりと確立できるようにすることが大切である。

そこで本校では、自らの思いを伝え、仲間と共に考えることにより、自分に自信を持ち、自己をしっかりと確立し、よりよく生きようとする児童が育成できるのではないかと考え、本主題を設定した。

道徳の時間においては、教材を通して話し合い、自分の生き方を考えると共に、自分の考えと友だちの考えを比べることによって、自分の生き方を見つめ直し、新たな考えを生み出せるような授業の在り方を研究していく。そのために深く考えさせる発問の方法、話し合いの工夫など、様々な観点から研究を進めていこうと考えた。

また、道徳の時間だけでなく、全ての教科・領域をはじめ教育活動全体との関連を大切にし、思いを伝え合う活動を取り入れ、実際の生活の場で実践していこうとする意欲や態度を育てていこうと考える。

3 研究の経緯

平成27年度から道徳教育研究協力校としての道徳教育の研究が始まり、今年度で3年目を迎えた。道徳の教科化という転換期にあって、本校においても、深く考える道徳の授業と道徳を中心とした教育活動について研究を重ね、本校のスタイルを確立してきた。

本校の児童は、全体的に明るく素直で、元気よい児童が多い。何にでも一生懸命取り組んだり、課題に対し真面目に向き合ったりすることができる。しかし、規範意識や主体的に自分で考えて行動する力、コミュニケーション能力等に課題が見られる。

研究を始めるまでの本校の教職員の実態としては、「授業の進め方がわからない」など積極的に取り組めていないという声が多く、そこからの研究のスタートとなった。

当初の実態から、道徳の授業づくりについて学び、週1回の道徳の授業を大切にする中で授業力を高め、深く考える道徳の授業を目指していこうという職員の共通理解のもと研究に取り組んできた。また、道徳の授業だけでなく、教育活動全体を通して、児童を育てていくために、各教科や領域、行事等の中で、「伝え合う力を付ける」ということを意識しながら研究を行ってきた。

2年目の研究を終え、どの教職員も道徳の授業への抵抗感が減り、それぞれに道徳の授業力を付けることができた。また、それぞれの取組を進める中で、児童が落ち着いて学習や生活、行事に取り組むことができるようになり、成長が見られるようになってきた。

しかし、目指す児童像については、次のような課題が明らかになった。

学習面では、学力が少しずつ上がってきているものの、学習習慣や基礎的・基本的な知識及び技能の定着が弱く、思考力や表現力に課題が見られること、生活面では、規範意識が低い児童や、主体性に欠け周りに流されやすい児童が多いことである。また、2年間重点的に取り組んできた、話す力や聞く力、コミュニケーション能力にも課題が見られた。

学校評価の中では、道徳の時間にはよい意見を言ったり、よく考えたりできるようになってきたものの、子どもたちの意識の中でそれが実際の生活につながらず、実践に積極的に生

かすことができていない、道徳で重点的に取り組んできたことが本質的な児童の内面の成長と行動の変化につながっているとあまり実感できない等の意見が出された。

そこで、今年度は、道徳の授業については引き続き研究を深めていくとともに、児童の実践面について、どう成長させていくかについて検討し、根気よく全校での取組を積み重ねていくこととした。

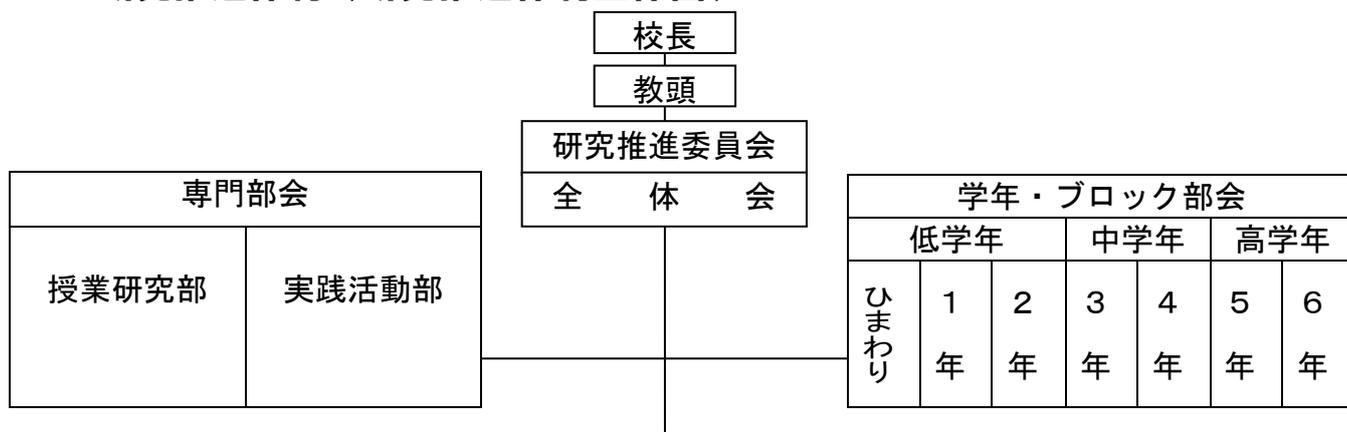
具体的な研究内容については、昨年度までの研究を基盤に、さらに深く考え、自分の生き方を見つめ直せる授業の在り方の研究に取り組んでいる。

道徳の授業については、2年間積み上げてきた「教材を通して自分の生き方を考え、友だちの考えと比べることによって、自分の生き方を見つめ直せるような授業の在り方」を引き続き研究してきた。そして、授業で学んだことと実生活での体験が子どもたちの意識の中でつながるような、本質的な学びをさせることを目指している。子どもたちが成長するのは、道徳の時間だけではなく、すべての教育活動の中であるという共通理解のもと、子どもたちの意識の連続化を図るため、様々な授業・場面の中で、計画的・意図的な活動を取り入れ、実際の生活の場で実践していけるように取組を行っている。

研究にあたっては、平成27年度から、四天王寺大学教育学部教育学科准教授の杉中康平先生を共同研究者として、共に研究を進めてきた。また、京都府教育委員会をはじめ木津川市教育委員会並びに教育関係諸機関の先生方にも御指導をいただいた。さらに、道徳専門研究員や他校の先生方にも広く校内研修に参加していただき、助言をいただってきた。

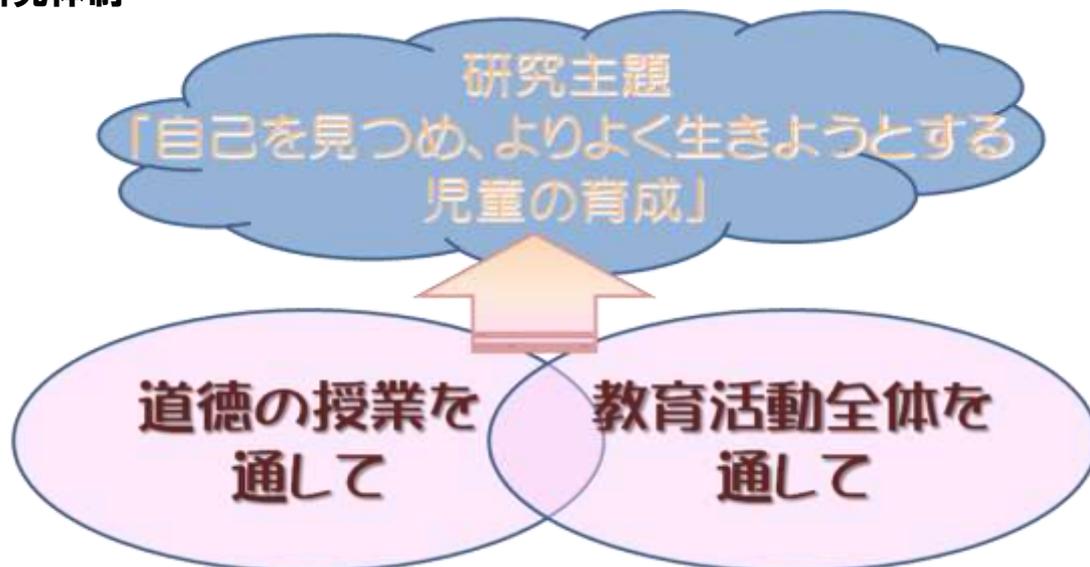
これらの研究を進めていくにあたって、全教職員が常に同じ方向性を持ち、道徳の授業だけでなく、日常のあらゆる生活場面において、いかに児童を成長させていくかということについて、常に共通理解を図りながら、取り組んでいるところである。

4 研究推進体制（研究推進体制全体図）



第2部 研究の実践

1 研究体制



(1) 道徳の授業を通して（授業研究部）

- ・ 魅力ある教材を提示し、心を揺さぶるような授業を実践する。
- ・ 自分を深く見つめ、考えさせる発問の方法を研究し、実践する。
- ・ 道徳の時間において、自分の思いを書いたり、伝えたりする機会を設定する。
- ・ 実生活でより実践力を高められるような授業の工夫をする。

(2) 教育活動全体を通して（実践活動部）

- ・ 道徳の時間以外の教科においても、多様な学習形態を有効に取り入れ、自分の思いや考えを伝える場面を充実させる。
- ・ 行事や特別活動など、様々な場面において、思いを伝え合う活動を取り入れる。
- ・ 道徳の時間で学んだ事などを実践していこうとする意欲や態度を育てられるよう、児童が意欲をもって取り組むことができる様々な活動場面を設定し、教職員の意思統一を図りながら、全校で取り組む。



② 総合単元的道徳学習

総合単元的道徳学習を学期に1度計画・実施する。育てたい児童の姿を目指し、より効果的に道徳性を育めるよう、道徳や他の教科、そして日常の生活での指導を意図的に計画し、意識の連続化を図る。

総合単元的道徳学習の終了後には、児童自身にその期間の振り返りをさせ、自分を客観的に見つめ直し、自分の生活に返していきけるようにする。

教師も、終了後、計画をふり返り、成果と課題を明らかにし、日常生活や次の指導へと生かしていくようにしている。

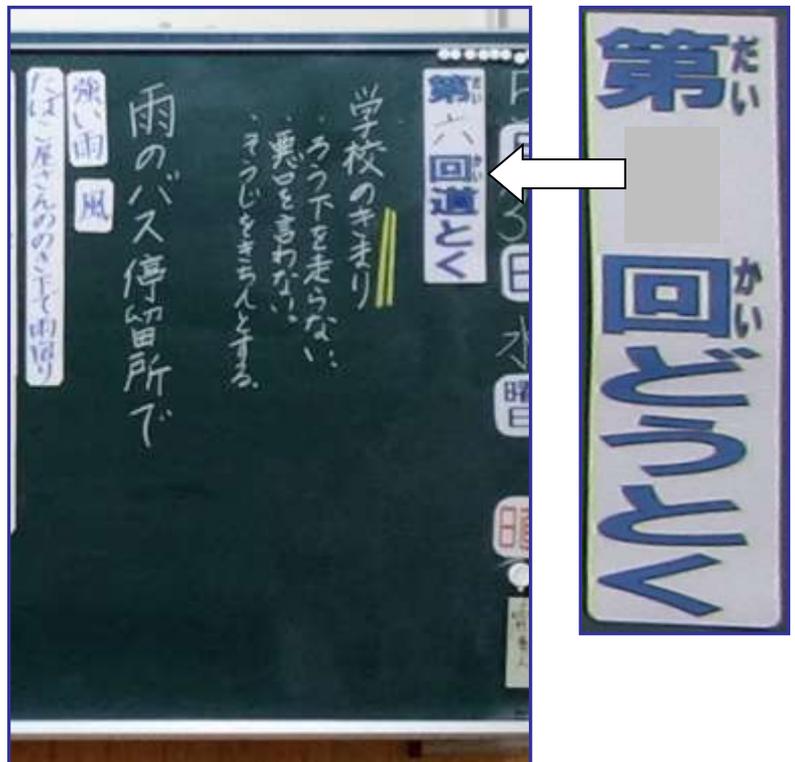
五年（1学期）総合単元的道徳学習計画案

時期	日常活動 事前事後活動	教科・道徳・特別活動 等	◎教師のねらい ○子どもの意識の流れ
5月1日	林間学習の振り返り	総合 「林間学習に向けて」 振活動 自分の役割をしっかりと果たし、協力して林間学習を成功させようとする心構えを育てる。	◎正しい道徳の合い、協力して高め合っていくとする心構えを育てる。 ○林間学習は自分たちだけの力で成功させていきたい。 ○任せられた振活動を友だちと協力して、最後までしっかりと頑張りたい。
		道徳 持参品で出会った少女（1） 時と場合をわきまえて礼儀正しい生活をしようとする態度を養う。	◎公共の場で礼儀正しく生活しようとする態度を養う。 ○心のこもった礼儀は大切だな。 ○人のことを考えて行動するって、すてきな。
		道徳 ふくらんだリュック サック（1） 規則性・公徳心 ままを守り、進んで公共の場の秩序維持に努めようとする態度を養う。	◎公共の場でままを守って、気持ちよく過ごすという態度を養う。 ○気持ちよく過ごすために、ままを守ることが大切だな。 ○林間学習では、みんなのことを考えて過ごしたい。
		学校行事 「林間学習」 自然体験・振活動	◎当日の振活動の役割をしっかりと果たし、思い通りに林間学習になるようにする。 ○責任をもって、振活動に参加しよう。
		振り返り 「林間学習」 林間学習を終え、成長した自分とこれから成長させたい自分について考え、成長と課題を振り返る。	◎仲間と協力し、いろいろな経験を積み、思い通りに林間学習になったことに気付かせる。 ○最後まで責任を持って振活動を頑張った。 ○みんなで協力するって大切なことだね。
成果と課題 ◎公共の場を使わせてもらっているという意識を持ちながら、時間やままを守って林間学習を行うことができた。全員で協力して、思い通りに林間学習のある林間学習を行うことができた。 ○林間学習が終わった後に気持ちの整理ができて、ままを守りたい（守ろうとしない）気持ちも減らした。林間学習と学校生活が繋がっていることも理解できたり、次の振り返り意識させる平立てが必要だと感じた。			

③ 週1回の授業を大切にするために

道徳の授業の際には、「第〇回道徳」という掲示を、全校で統一して行うようにしている。

教師側では、年間35時間の道徳の時間を確実に実施する意識を持つと共に、児童も毎週の授業の積み重ねを意識することができる。週1回の道徳の授業を教師も児童も意識しながら大切にしようとする気持ちができきている。



④ 授業づくり

「考え、議論する道徳」を目指すために、答えが一つでない課題についてみんなで向き合い、話し合うことによって、人間としての生き方について自覚を深めていけるような道徳の授業形態を考えていく。道徳ノートの活用をはじめ、ペアトークやグループトーク、役割演技等の多様な指導方法を工夫する。また、授業の始めと終わりで、児童の中に気づきや考えの変化があるような授業展開を大切にする。板書についても、価値をとらえやすくするための構造化されたものとなるようにする。

ア 教材分析シート（道徳的生き方等が変化する教材の場合）

教材分析にあたっては、杉中准教授が提唱されている分析の方法を用い、本校の教材分析シートを作成した。

教材の場面を「Before(道徳的な変化前)」「助言者の登場」「転(道徳的変化)」「After(変化後)」の3つの場面に分けて考える。主人公の道徳的変化前の姿と後の姿に焦点を当て、主人公が何に気づき、どのように価値に気づいたかを明らかにすること、詳細な読みに陥らないよう一文読みをすることで、教材をシンプルにとらえやすくなった。

イ 発問（中心発問・補助発問）

教材分析から発問を大きく3つ(3種類)にする。道徳的問題を明らかにする「Beforeの発問」、主人公の気づきに迫る「転又はAfterの発問」、そして道徳的価値をおさえるための「価値追求の発問」である。

その発問に加え、より価値に向かい、価値を深めるための補助発問を用意しておく。この補助発問は、授業において使用しないこともあるが、この補助発問により、より価値に迫ることができることが多い。補助発問は、時に主人公でなく、主人公を取り巻く他の登場人物の気持ちを問う場合もある。このように、発問を吟味することで、前半の時間を短縮し、中心発問と後段で十分練り合えるような時間を確保するようにしている。

ウ 伝え合う力

伝え合う力を育成するため、ペア・グループ・全体等、様々な形態での話し合い活動を取り入れる。その際、自分の考えをまとめるための時間の確保を行い、考えたことをペアやグループで交流させる。そしてそれを全体へと広げていくようにする。少人数での交流により、一人一人が自分の考えを表現し、議論することができる場とする。

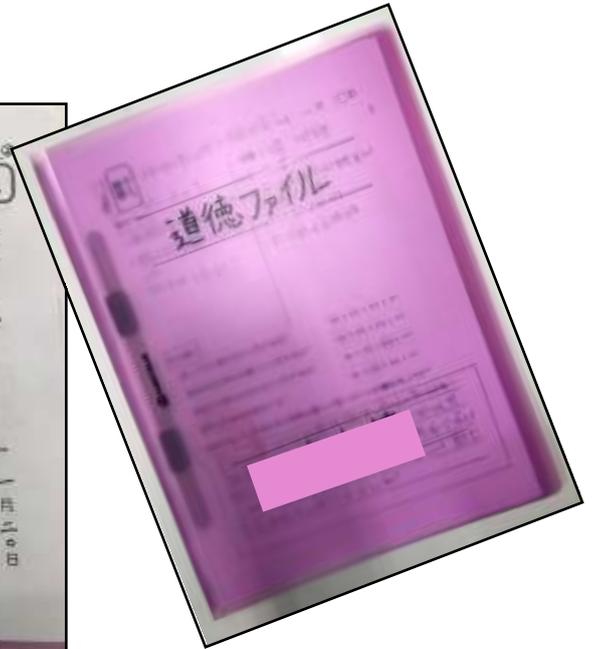
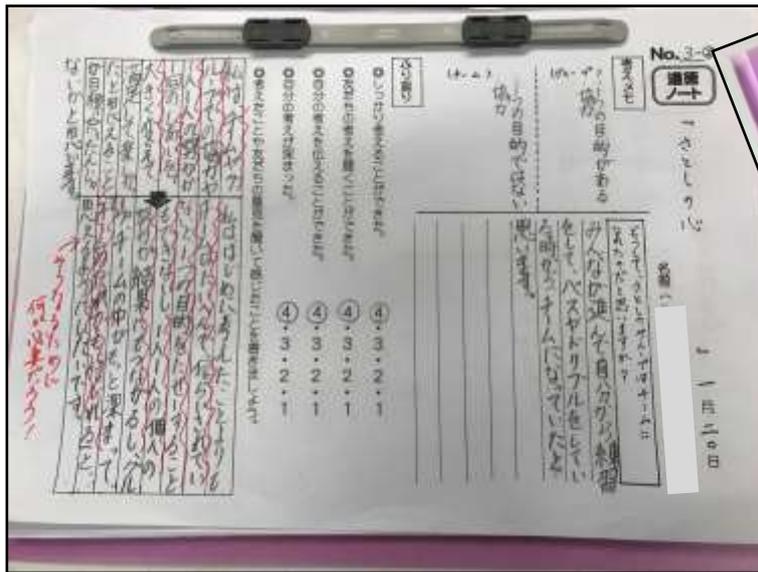
ペア・グループ学習は、道徳の時間だけでなく、各教科で積極的に取り入れたり、特別活動などの場で思いを表現する場面を設定したりすることで、伝え合う力を付けていくようにする。

また、道徳の時間の振り返りについては、自己に引きつけて考え、どんな学びがあったかを振り返るようにしている。さらにそれをお互いに伝え合い、共有することで、その時間の学びが深まると考えられるので、この時間を大切に、多くの時間を取るようにしている。

エ 道徳ファイル・道徳ノート

児童に自分の考えを持たせる、そして自分の考えをもとに話し合うことが、考えを深め合い、道徳的価値やねらいに迫ることにつながる。道徳ノートを使用し、書いてまとめる活動を取り入れることによって、自分の考えを整理し、発言しやすいようにする。また終末で、1時間の道徳の時間を振り返ることで、より深く道徳的価値について自覚することができる。

さらにそれを毎時間ファイルに綴ることで、ポートフォリオとし、道徳の時間の評価につなげる一手段とする。この評価は教師のみならず、児童が自らを振り返って、成長を実感し、これからの課題を見つけるという児童自身の評価となるよう、道徳ノートを活用していきたい。



⑤ 評価

児童の成長を見守り、努力を認めたり、励ましたりすることによって、児童が自らの成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指すための研究を行う。

- ・道徳の時間における道徳ノートによるポートフォリオ評価
- ・道徳の時間以外の教育活動全体における児童の成長の様子によるパフォーマンス評価
- ・児童分析（抽出した児童）による継続的な評価

	普段の様子	「さとしの心」のふりかえり	振り返りの感想
A	みんな遊びでは、積極的に参加しているが自分が楽しむことを優先してしまい、周りのことを考えず、自己中心的な行動をとることが多い。	楽しかった。	何が楽しかったんですか。(MR)
B	体育の授業やみんな遊びでは、自分が活躍できたときは心に余裕ができ、周りも気遣うことができるが、上手くいかなくなると、不貞腐れた態度をとり、周りの友達に不快な思いをさせることがある。	自分もしポートボールの試合をしたとき、「すごいね」とか、「パス」とかを言って、少しずつみんなで上手くなって試合に勝りたい。	NNさんの意見に賛成です。(MS)
C	運動が得意で、活躍する場面が多く見られるが、勝ち負けに執着しすぎることがあり、結果によって友だちとトラブルになることがある。	前は楽しかったけど、2試合目はいい試合だなあと思いました。	1試合目は気持ちよく終われなかったけど、2試合目は気持ちよく終わってよかったね。(MK)
D	普段から、1人でいることが多く、周りと協力しようとする姿があまり見られない。みんな遊びの時は、いきいきとした顔で活動している。	とてもみんないっぱい書いていて、みんな話を聞いているからすごいなと思いました。	とてもぼくもいいと思いました。(FR)
E	運動があまり得意ではなく、体育やみんな遊びもあまり積極的ではなく、協力もできていない。でもがんばりやさん。	みんな試合は負けても、試合で良かったことを発表していた。	いいことをかけている。(IH)
F	休み時間は、教室で決まった友達と話をしていることが多い。授業中では、自分の思いを伝えようとする意識が低い。	ぼくも、みんなと仲良く遊べたら楽しい。	みんなで仲良く遊べたらいいね。(NN)
G	クラスからの信頼も厚く、みんなで助け合って目標に向かっていこうとする姿勢が見られる。	やっぱり、スポーツは練習したり協力したりするのが大切だと思いました。それに、試合で負けても勝っても楽しかったらそれでいいと思いました。	ぼくもそう思います。(KK)
H	みんな遊びや係活動では、「みんなが楽しめるように」ということを意識して行動できていることが多い。	1人よりみんなで協力した方が楽しく仲良くやれるから協力してやったほうが面白い。	わたしたちも協力してやった方がいいと思いました。(KY)
I	体を動かすことが好きで、運動も得意。積極的に自分の思いを伝え、体育の授業やみんな遊びでは、協調性のあるプレーができています。	みんなで練習すれば、上手くなるし、パスが回ったりするしみんなが楽しくなりました。	やっぱりみんなでも楽しくするのが楽しいですね。(LN)

⑥ ローテーション授業

1つの道徳の教材を作成し、一人の教師が自分のクラスと隣のクラスの両クラスで授業を実施するローテーション授業にも取り組んだ。1つの教材研究に時間をかけることができ、また同じ教材で2回授業ができるので、改善をしながら授業ができ、授業力の向上が期待できる。また、他クラスの状況を把握できることによって、自分のクラスだけでなく、学年の児童としてとらえ、課題を共有することができる。

⑦ 授業研究

各クラス1回、年間計12回の研究授業（うち杉中准教授に指導を頂く全校での授業研究3回、ブロック学年での授業研究9回）を行う。

指導案の作成に当たっては、考えを深め合う道徳の授業づくりをする上で、工夫するポイントや授業改善の視点を明確にし、意識するようにする。

研究授業前には、指導案をもとに事前研究会を実施し、授業後には、授業評価シートをもとに、事後研究会を充実させることで、全教職員が課題を共有し、日常の指導へとつなげていけるようにする。

ブロック授業研究会では、事前研究会・事後研究会は校内研究会として同日に設定し、その他の先行授業や研究授業はブロック学年ごとに行う。

どの担任も、年間に一度は研究授業を行うことで、全教職員の学びの場が増え、自らの授業への新たな視点を取り入れていくよい機会となり、お互いの刺激の場となっている。



⑧ 研究授業のまとめ

各事後研究会後には、授業研究部を中心として、研究授業から見えた課題や方向性についてまとめる。記録として残していき、各授業研究での成果と課題を、次の授業へとつなげていくようにしている。



研究授業まとめ	
授業日	平成29年6月14日(水) 5校時
学年・組 授業者	3年花組 田口 沙希
主題名 <内容項目>	みんなで使う物 <勤労、公共の精神 14C>
資料名	「水飲み場」(文庫堂)
成果	<ul style="list-style-type: none"> 導入の写真が効果的だった。 中心発問までの時間が短く、コンパクトにまとめられていて、よかった。 補助発問で、ひろこさんの気持ちを聞いたことにより、価値に迫ることができた。 振り返りの時間が、たっぷりとれてよかった。また、友達のリターンに対して、意見を言えていたのがよかった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 学級規律がきちんとしているのはよいが、どの発問に対しても挙手で答えるので、本音のつぶやきを捨てることができない。 もう少し、好きふりを入れてもよかったのではないかな。 よしお君の気持ちにもう少し共感させることで、本音に迫れたのではないかな。 展開前後で、自分だったらという発問は、入れない方がよい。
その他	

⑨ 教師の道徳ノート

授業計画をするにあたって、最低限、明確にしておきたい項目を作り、授業における留意点も明記した。また、授業での児童の発言などを書きとめておくメモ欄を作り評価の一材料とするため、教師の道徳ノートを作成した。

これは、教師自身の授業の振り返りとしても活用している。



道徳ノート 第 四 回 「 _____ 」 平成 年 月 日 () 校時

- 初め
- 発問など *前半をコンパクトに中心発問で50%程度 *中心発問・アワー9割・振り返り
- 授業計画 *発問は4発問以内を原則、21も中心発問 1回をアワーに
- 児童メモ (授業中の発言や思惑等をメモ)

名前	メモ	名前	メモ

5. 授業について (ふりかえり・感想等)

(3) 教育活動全体を通して（実践活動部）

① 合言葉「日本一輝こうチーム棚倉」

「日本一輝こうチーム棚倉」を全校の合言葉として、それを目指してそれぞれの学級活動や委員会活動に工夫を加え、取り組んでいく。また、全校での統一した取組も行い、全教職員で共通理解を図りながら、重点的に取り組んでいく。

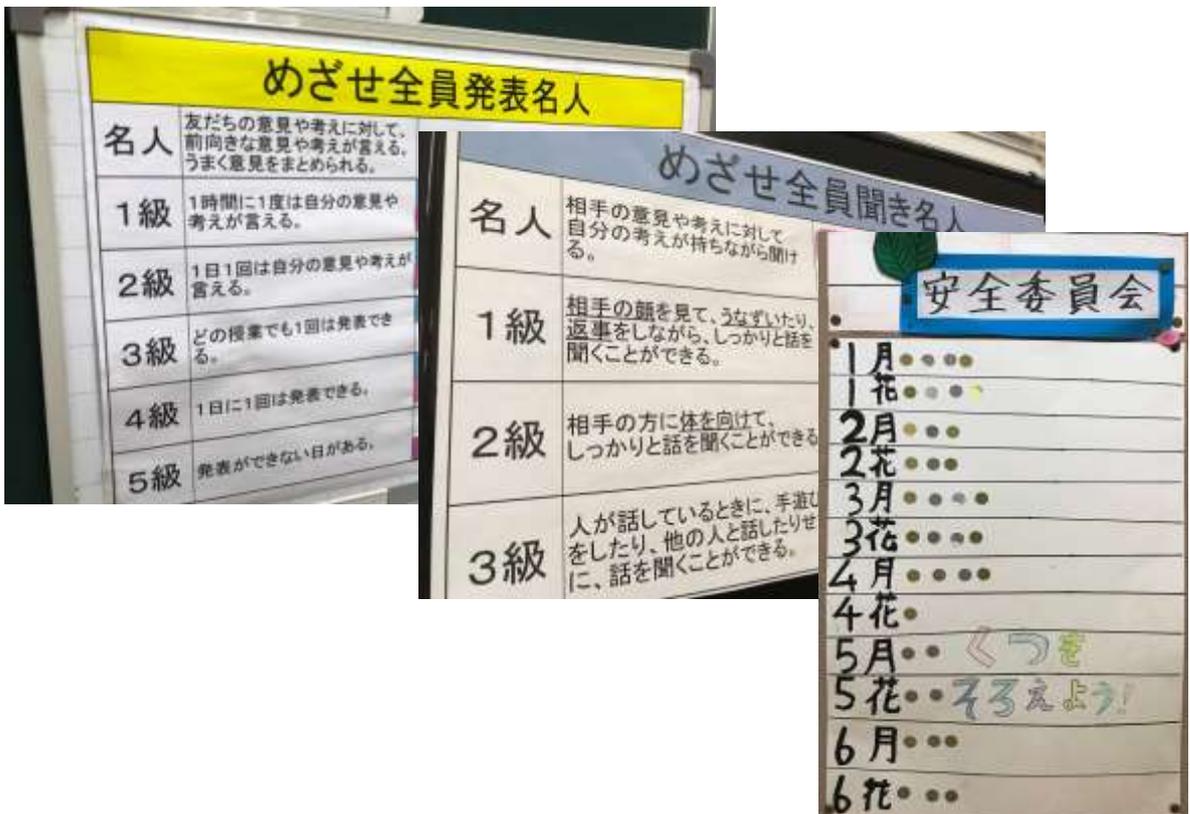
- (例) ・児童会本部
 - 「花いっぱい学校」「あいさつ&エコ運動」
- ・安全委員会
 - 「名札点検」
 - 「日本一安全な学校（ろう下歩行点検）」の取組
- ・放送委員会
 - 「ファインプレーニュース
(すてきな場面を投稿・紹介)」
- ・体育委員会
 - 「日本一の体育大会にしよう」
 - 「全校の仲を深めながら、楽しく体を鍛えよう」
(全校遊び)



② 言語活動

児童が、自分の思いや考えを積極的に話し合ったり、考えを深め合ったりできるように、学習場面や教育活動全般を通じて言語活動や環境を整える。各クラスや各学年の児童の実態によって、言語活動を充実させるための工夫を考え、取り組んでいる。

- (例) ・「話し方名人」「聞き方名人」
- ・宿題の作文と話し合い活動を組み合わせた取組 等



③ ファミリートーク

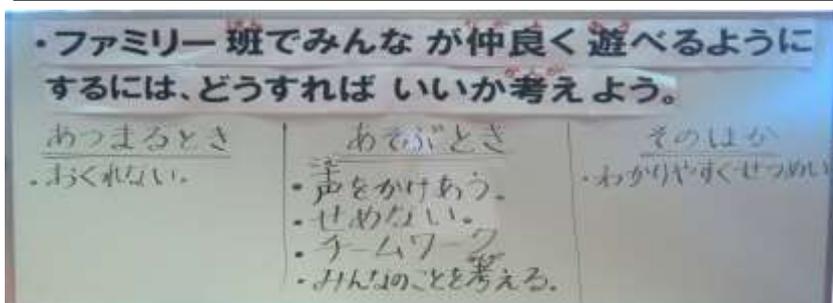
ファミリー班（異年齢班）を活用しながら、全校で一つのテーマについて考え、話合える場を設ける。テーマについては、行事等の関連を図りながら、児童の身近な問題や話題を計画的に設定している。

6年生が中心となって話し合いを進め、各自が自分の思いをグループの中で語り合える機会となっている。ファミリートークを効果的に実施するために、各学年の発達段階に合わせて、事前に考えを持たせたり、心構えを指導したりするなどしている。また、ファミリートーク後には、各クラスで振り返りをし、話し合った内容を事後につなげていくようにしている。振り返りを校内で掲示するコーナーを作り、意識の連続化を図るような工夫をしている。

ファミリートークは、道徳の時間で考えたことと、実践との橋渡しの役割をとらえ、日常の行事や活動とのつながりを大事にし、児童にとってより身近なテーマで話し合いをし、その後も継続的に取り組んでいくことを心掛けている。

また、ファミリートークは、教職員も児童と共に考え、発言することを大切にしている。時には、保護者にも参加を募り、参加していただくことで、学び合いや理解を広げる場ともなっている。

学年	集合	話し合い	発表1	発表2	聞き方	
低学年	輪番集合する。	自分の意見を話す。	大きな声で発表する。	「～です」「～ます」と、丁寧に話す。	話し手の方を見て聞く。	
中学年	代表委員を先頭に無言集合する	意見に理由を付けて話す。	聞き手を意識し、大きな声ではっきりと話す。	意見に理由を付けて発表する。	必要に応じて、反応しながら聞く（うなずく等）。	歌詞を覚えて歌う。大きな口を開けて歌う。
高学年	早めに無言集合し、静かな雰囲気を作る。	自分の意見を持ち、みんなの意見を引き出すようにする。	聞き手を意識して、発表の内容がより伝わりやすいように工夫する。	3文以上の文で、友達の見えと比べながら発表する。	自分の考えと比べながら聞く。	リズムに乗って明るい声で歌う。



④ ボランティア活動 TCV (たなくらチャイルドボランティア)

児童からボランティアを募り、校内をよりよくする活動をする。児童の自発的な活動の場を設定することで、仲間と一緒に自分たちの生活を自らよくしていこうとする雰囲気作りをしていくねらいがある。

現在、主に活動しているのは、2～6年生までの100名弱で、花いっぱい为学校づくり、校内美化活動などを行っている。休み時間などに、参加できる児童が集まり、活動を行っている。



⑤ 道徳通信「Good Heart」

道徳は学校教育だけでなく、家庭との連携も大切であるという思いから、道徳通信を発行している。研究授業後には、全校の保護者に向けて、授業の様子や児童の感想等を載せた道徳通信を発行し、保護者にも学校での取組を知らせている。自分の学年だけでなく、他の学年の取組も知ってもらうことで、全家庭や地域で全児童をみていこうとする雰囲気を作っていきたい。

道徳だより 第6学年
グッド・ハート
Good Heart
本津川市立樹島小学校 平成29年6月23日

本誌では、道徳授業の事例を中心に紹介しています。この他ページでは、自学年で取り組んでいる加算や算数の様子も紹介しています。学校で子どもたちの様子を写ってもらうことに、お家で印刷がきっかけになってもらえたら幸いです。

西山さんはなぜ園長になれたのでしょうか。

- ・おばあさんの言葉をきっかけに、変わったから。
- ・學所訓練を通して、働くことの喜びを知ったから。
- ・いろいろと工夫した。
- ・小さなことでもコツコツと続けてきたから。

「ぼくの仕事は便所そうじ」

6年生では、「働くこと」について考える学習をしました。
東武動物園公園の名譽園長を務められた西山君志さんが、上野動物園で働き始めたころの話です。気の進まないままにやっていた「便所そうじ」でしたが、おばあさんの言葉を聞いたことがきっかけで、誰かのために仕事をしようという意欲が芽生え、より意欲をもって楽しく仕事をするようになっていきます。

西山さんの生き方を通して、学校や地域においても自分に与えられた仕事に誇りをもって働いたり、周りの人の気持ちを考えたりすることへ意欲を培うきっかけとしてほしい、そんな思いをもって、授業を行いました。



西山さんの生き方で学校生活の中で学ばせようなことは？

- ・少しでもファミリー紙を引っ張ってほしい。
- ・楽しくそうじができるように工夫をしてほしい。
- ・みんなのために頑張りたい。



(児童の感想より)

これからの掃除では、任う人が「気持ちがいい。」と思ってくれる様になりたいと考えました。

どんな小さなことでも、続けることが大切なんだとおもいました。

小さなことを積み重ねていくことが、いまは自分の力になると思いました。

これからは、自分も人のために気持ちよくそうじをしたいと思いました。これからの生活に生かしていきたいと思いました。



学校での役割には・・・？

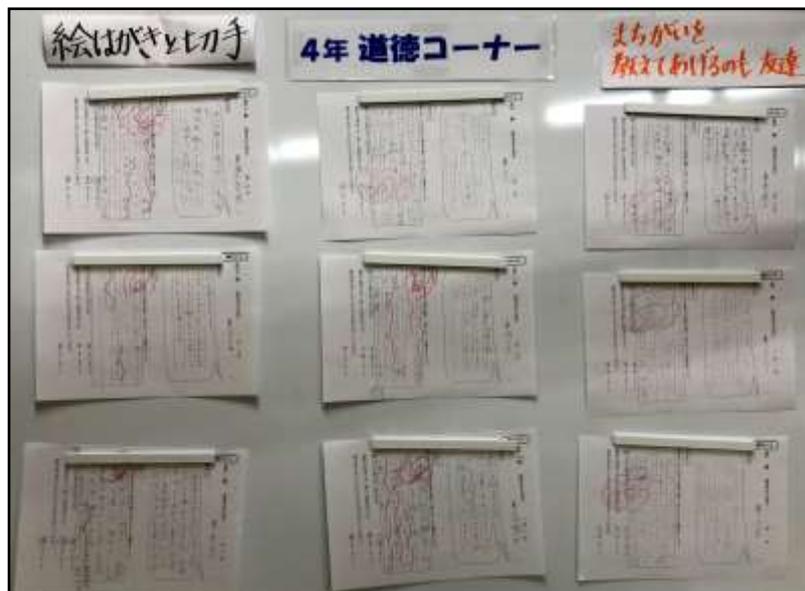
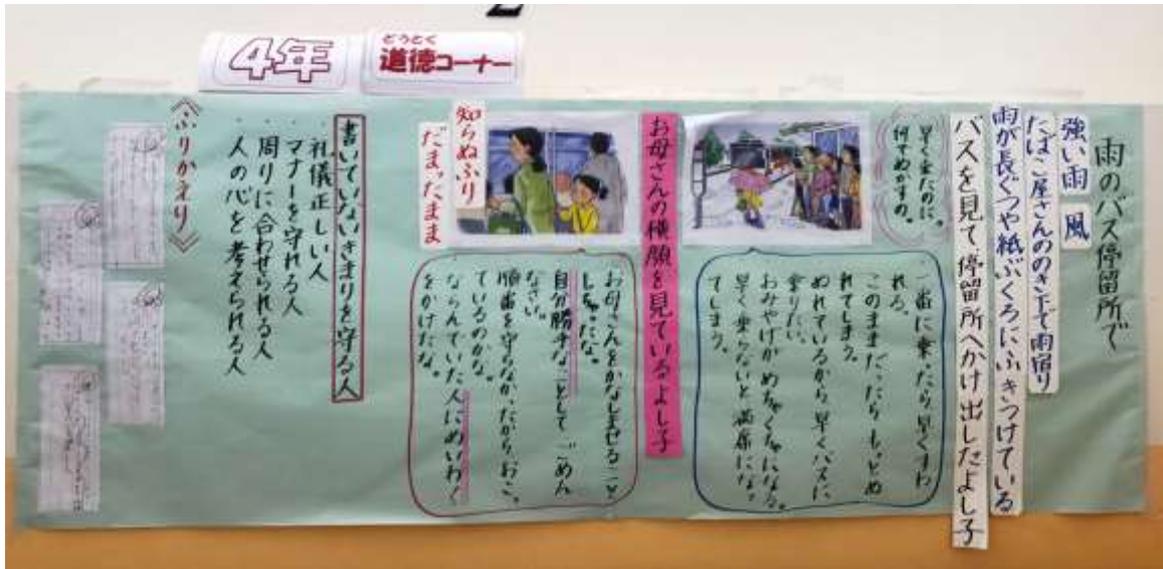
- 委員会活動
- 係活動・倉庫班の班長
- 読書活動
- ファミリー紙
- そうじ・・・

どんな気持ちで取り組んでる？

- ・いや。
- ・めんどくさい。
- ・やがいがない。
- ・大変

⑥ 道徳コーナー

道徳コーナーを設け、研究授業の授業の流れや児童の考えの流れが分かる掲示を行い、児童が立ち止まって道徳に触れ合える場を作る。授業の内容を掲示することで、単発の授業に終わらず、その後の児童の意識が連続していくようにしている。さらに児童だけでなく教師自身の意識の連続化も図れる効果あると考える。また、他の学級や学年の児童にとっても、友達の頑張りに触れるよい機会となっている。



第3部 研究の成果と課題

1 成果

(1) 児童の育ち

この2年半の道徳の時間をはじめとした様々な取組を通して、子ども達に変容が見られる。挨拶を積極的にしたり、人への気配りができたりと、やさしい児童が増えてきた。また道徳の時間においては、自分の意見をはっきりと言える児童が増え、それを聞き合うことで、自分を見つめられるようになりつつある。道徳以外の場面や授業においても、自信をもって自分の意見を伝えられるようになってきた。

(2) 意識の連続化

総合単元的道徳学習を学期に1回ずつ取り組んだり、行事や日常活動などを意図的・計画的に道徳の時間に結びつけたりすることで、教育活動全体を通して「意識の連続化」を図ることができ、児童の育ちへとつなげることができた。

(3) 授業の質の向上

教材分析シートを活用した授業づくりのスタイルが教師の中で定着し、毎週の授業に前向きに取り組めるようになった。道徳の授業づくりの研究は、他教科における授業力の向上にもつながった。

(4) 全校での統一した取組（授業研究会・ファミリートーク・合言葉等）

道徳の時間を中心とした全校での統一した取組をする中で、共通理解を図ったり、お互いの授業を参観し討議したりする時間が増えたことで、教職員のベクトルが揃ってきた。教職員の共通理解を大切にすることで、全教職員で全校の児童をみるという素地ができ、それが子ども達の育ちへとつながっている。

(5) 評価に向けた取組

道徳科の評価に向けて、『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）』をもとに、本校なりの検討を行った。具体的には、児童の変容や道徳ノートの振り返りをもとにした評価の仕方について全教職員で検討するモデレーションなど、試行錯誤を重ねた。その中で、実践への意欲を高めるような評価へとつながる一定の方向性が見えてきた。来年度の教科化を見据え、今年度は、全学年において通知票の総合所見の中に道徳の評価を入れることにしている。



2 課題と今後の方向性

(1) さらなる意識の連続化→実生活での実践力

児童の育ちが見えてきた一方で、実生活での実践力はまだ弱さが見られる。道徳の時間を中心として、さらなる意識の連続化を図り、教育活動全体を見通し、意図的・計画的に児童の成長につながるような取組をしていく必要がある。

(2) 話す力、聞く力の向上

話す力・聞く力は一定の成長はあるものの、まだ課題が残る。さらなる取組の中で、仲間と共に考え、深め合える児童を育成していきたい。

(3) より深く考える授業

本校の道徳の授業のスタイルは一定確立してきたものの、さらにより深く考える授業をめざして、さらなる研究を深めていく。

(4) 評価に関する研究

道徳科の全面実施に向けて、今年度の実践を交流・検討し、児童が自らの成長を実感し、意欲的に取り組もうとするきっかけになるような評価を目指し、さらに具体的な方法を探っていく。

(5) さらなる家庭や地域との連携

児童の道徳性を育むためには、地域や家庭と連携が不可欠である。より、保護者や地域の方と連携し、児童の成長へとつながる取組を行っていく。



おわりに

今年度の学習発表会の最後のプログラムは全校児童による「ふるさと」の合唱でした。2013年のNHK全国学校音楽コンクール小学校の部の課題曲になった楽曲です。この日のために、子供たちは詞の意味を聞き、考え、「私たちにとってのふるさとは、この棚倉」という思いを確かめ合いながら、練習をしてきました。そういう子供たちの思いが重なって、素敵な歌声が響き、当日参加された地域や保護者の方からは「とても感動しました。」とのお言葉をいただきました。

この合唱の取組を通じて子供たちは、仲間とともに考え、深め合うことができたと思います。このように、教育活動全体でよりよく生きようとする児童の育成に取り組んでいるところですが、この3年間は「道徳科」の研究を中心に据えながら、その取組を進めてまいりました。子供達の心を揺さぶるような授業をするための教材はどれがいいのだろうか、自分を深く見つめ、考えさせるためにはどのように発問すればいいのだろうか、校内研修を積み重ねました。また、自分の思いを伝え合う力を育てるには、道徳の授業以外のどんな活動と連携させていけば効果的なのか、思いを伝えるための学力を着実につけるにはどうしたらよいか、と教育活動全体についても検討してきました。

しかしながら、本校の3年間の取組は、まだまだ不十分なものであり、研究すればするほど新たな課題が見えてまいります。より系統性のあるカリキュラムの開発、仲間とともに考え深め合えるようにするための工夫、子供たちの意欲を高める評価方法の策定および実践力を高めていく取組などです。これからも、これまでの研究成果を踏まえ、授業力・指導力を磨き、よりよく生きようとする子供たちの育成を目指して日々研鑽を積んでまいりたいと思います。今後とも皆様のご指導とご助言を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、研究にあたりご指導を賜りました京都府教育委員会、京都府山城教育局、京都府総合教育センター並びに木津川市教育委員会をはじめ、本日はご多用な中ご参会いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

— 研究同人 —

【平成27年度】	西城 誠一	大塚 弘奈	谷村 聡	浅野 勝
【平成28年度】	波尻 寛之	山本 恵子	加藤 辰彦	
【平成29年度】	河野 收	高橋 眞弓	奥西 香織	大西 浩安
	荒川 和美	中村 基子	村上 真裕子	清水 弥生
	高井 ゆき	瀬戸 陽子	田口 沙弓	岩崎 美幸
	桂 貴人	田中 美帆	中村 臨太郎	近藤 晋平
	吉川 祥子	大伍 治美	市村 理恵子	亀井 隆昌

共同研究者：四天王寺大学 教育学部 教育学科 准教授 杉中 康平先生

平成 29 年度

京都府小学校教育研究会道德教育研究大会

研究紀要

自己を見つめ、よりよく生きようとする児童の育成
～仲間とともに考え、深め合う道德授業を通して～

発行 平成 29 年 12 月

木津川市立棚倉小学校

〒619-0201 木津川市山城町綺田局塚 14 番地

TEL 0774-86-2513 FAX 0774-86-5698